琉球大学学術リポジトリ

大韓民国智異山国立公園における食肉目の分布と食性の比較分析

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学21世紀プログラム
	公開日: 2007-07-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 渡辺, 伸一, 呉, 大鉉, Oh, Daehyun
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/842

PE-12　大韓民国智異山国立公園における食肉目の分布と食性の比較分析

渡辺伸一[1)]・呉大鉉[2)]

[1)]琉球大学理工学研究科 COE、[2)]琉球大学大学院理工学研究科

朝鮮半島南部に位置する智異山国立公園は、険しい山岳地帯によって豊かな自然環境がいまも残された地域である。長崎県対馬から海峡を隔ててわずか 200km の位置にあるため、哺乳類相は対馬と類似している。特に、日本では希少野生生物に指定されたツシマヤマネコと近縁のアムールヤマネコ *Prionailurus bengalensis euptilura* が分布しており、そのほかにも中小型の食肉目が同所的に分布している。本研究では、本地域における食肉目の分布と食性について調査し、その種間関係について考察した。また、本調査の結果を他地域の *P. bengalensis* 個体群の結果と比較することで、その食性の地理的変異について分析した。

2005 年 3 月、5 月、8 月と 2006 年 2 月に調査地を訪れ、山地部およびその麓の低地部を歩いて、1）食肉目各種の糞の分布について調査した。発見した糞の位置は GPS で記録し、糞の形状や匂い、糞中の毛の形状によって種の同定を行った。採集した糞は洗浄ろ過して内容物を取り出し、被食動物を同定した。結果は、出現頻度で示し、2）食性の構成を種間で比較すると共に、Pianka の指数を算出して3）種間の食性の重複度について調べた。また、結果を冬季（2、3 月）と夏季（5, 8 月）に分けて4）各種の食性の季節性、および山地部（標高 500－1500m）と低地部（標高 50－500m）における、5）食性の地域性について調査した。

1）計 6 種の食肉目の糞 439 個を採集した。ヤマネコとタヌキ *Nyctereutes procyonoides* の糞は、低地部から山地部まで幅広い環境に分布していたのに対し、チョウセンイタチ *Mustela sibirica* とキエリテン *Martes flavigula koreana* の糞は山地部に多く、カワウソ *Lutra lutra* の糞は低地部の河川流域にのみ分布していた。ノネコ *Felis catus* の糞は、山地部でも低地部でも分布していたが、集落やゴミ集積地周辺に多かった。

2）糞数の少なかったカワウソ、キエリテンを除いた４種について食性分析を行った。ヤマネコとイタチは、齧歯類を最も多く捕食していたが、ノネコは齧歯類と生ゴミと思われる人工物、タヌキは昆虫類と果実を多く捕食していた。

3）食性の重複度は、ヤマネコ－イタチ間で最も高く、ついでヤマネコ－ノネコ間で高い値を示し、これらの間に餌資源の競合があることが示唆された。

4）いずれの種でも、食性の季節性がみとめられ、夏季に食性は多様で冬季は餌の多様度が低く、齧歯類に依存した食性を示した。

5）いずれの種でも食性の地域性がみとめられ、齧歯類は山地部で捕食頻度が高く、鳥類は低地部で高かった。

本調査地のヤマネコの食性は、安定して齧歯類に依存した食性を示す熱帯域の *P. bengalensis* と、齧歯類を中心に多様な動物を捕食し、餌構成が季節的、地域的に変化する温帯島嶼環境である対馬に生息する *P. bengalensis* の食性の、ちょうど中間に位置するものだと考えられる。こうした *P. bengalensis* の食性の地理的変異は、潜在的な餌となる動物相、気候の変化による餌資源の利用可能性、および他の食肉目との競争の程度、などにより生じるものと考えられる。